「石展」からみえてきたもの
—「兄弟館」による2回の共催展示の開催報告—

神奈川県立歴史博物館　丹治 雄一
神奈川県立生命の星・地球博物館　山下 浩之

はじめに

神奈川県立歴史博物館（以下、必要な場合を除き「歴博」と略記）と神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、同様に「地球博」と略記）は、1967（昭和42）年に横浜・馬車道の地に開館した「神奈川県立博物館」を母体とする兄弟館である。1995（平成7）年に歴博と地球博に分離した後は、それぞれが歴史系博物館と自然史系博物館として博物館活動を展開し、事業連携を行う機会は極めて限定的であった。そのような状況下で、丹治は地球博の地質学・岩石学が専門の山下、歴博考古学担当の千葉毅、中世史担当の鳥居和郎、民俗学担当の新井裕美の各学芸員からなる研究グループを立ち上げ、歴博での岩石・石材をテーマとした特別展開催のための共同研究を2014（平成26）年度より開始し、2016年2月6日から3月27日を会期とする初めての共同開催の特別展「石展—かながわの歴史を彩った石の文化—」（以下、必要な場合を除き「石展1」と略記）を企画した。また、「石展1」終了後には古生物学・地質学を専門とする地球博の田口公則の参画を得て共同研究を継続し、同年12月17日から2017年2月26日に地球博において企画展「石展2—かながわの大地が生み出した石材—」（以下、同様に「石展2」と略記）を開催することができた。

本稿では、兄弟館によるはじめての共催展示であった「石展1」および「石展2」の内容を紹介し、歴史系博物館と自然史系博物館の学芸員による共同研究や共催展示が持つ可能性の一端を提示してみたい。

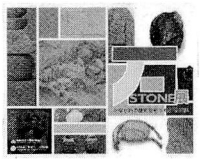
1 「石展」開催の経緯と「石展1」の展示内容

展示内容を紹介する前に、「石展」開催に至る経緯についてやや詳しく触れておきたい。

「石展」のきっかけとなったのは、現在歴博の建物となっている旧横浜正金銀行本店本館（1904年竣工、重要文化財・史跡）の外壁の石材であった。日本近現代史を専門とする丹治は、歴博建物の調査研究を継続的に行っており、2階と3階の外壁に使用されている足柄下郡湯河原町鍛冶屋で採掘された「白丁場石（しろちょうばいし）」なる石材の存在が気になっていた。この石材については、採掘最盛期の明治・大正期に記された現地調査報告が複数確認されており、それらの資料はかなり以前から把握していたが、本格的に調べ始めたのは、東日本大震災後の2011（平成23）年秋にその石切場跡（石材業界では石切場のことを「丁場」と呼ぶ）の現地調査を行ってからであった。これらの文献および現地調査で得られた知見と丁場跡で採集した岩石を山下に示したところ、「白丁場石」は箱根火山の形成過程を研究テーマとする山下がこれまでに見たことのない岩石であり、箱根周辺では非常に珍しい白色（薄い色味）の安山岩系石材であるとのコメントを得た。こうしたやりとりの中で、翌2012年に丹治が歴博を会場とする岩石と石材をテーマとした歴博と地球博の共催展示を開催できないかと提案し、山下に協力の内諾を得たことが「石展1」のスタートであった。また、歴博は1995年のリニューアル開館以後、神奈川県の財政状況の悪化にともない特別展開催予算が継続的に削減されていたことから、地球博との共催展示は限られた予算の中でも来館者に関心を持ってもらえ、しかもこれまで歴博で開催したことがないような新たな視点での展示を企画できないかと考える中で着想したものでもあった。ただ、近現代史分野に限定した岩石学との連携では展示に広がりを欠くため、歴博で他の時代・分野を担当する学芸員を加えて、かながわの大地を形成する岩石を石材として利用し、人々が旧石器時代から現代まで営んできたさまざまな活動を取り上げる展示を構想し、2014年から本格的に共同研究を進めることとしたのである。

このような経過で開催に至った「石展1」の構成は、表1にも見られるように「かながわの大地のなりたちと岩石」「石とかながわ」「技術が伝わる・人が伝える」「石を運ぶ・石が広がる」「くらし・信仰と石」の5章立てであった。「1」はおそよ1億年前に始まったかながわの大地の形成過程と

表１　兄弟館による２回の共催展示の概要

展示名称	特別展「石展―かながわの歴史を彩った石の文化―」	企画展「石展２―かながわの大地が生み出した石材―」
会期	2016（平成28）年2月6日（土）～3月27日（日） （開館日数45日）	2016（平成28）年12月17日（土）～2月26日（日） （開館日数46日）
会場	神奈川県立歴史博物館 特別展示室・コレクション展示室・導入展示室	神奈川県立生命の星・地球博物館 特別展示室
入館者数	10,062人（有料・無料合計）	21,480人（無料）
展示構成	1　かながわの大地のなりたちと岩石 2　石とかながわ 3　技術が伝わる・人が伝える 4　石を運ぶ・石が広がる 5　くらし・信仰と石	1　かながわの石材 2　石を加工する道具 3　石材と関わりのある人々 4　箱根ジオパーク
印刷物	 特別展図録『石展―かながわの歴史を彩った石の文化―』 （2016年2月発行、112ページ）	 企画展リーフレット「神奈川のおもな石材産地と石造物」 （2016年12月発行、4ページ）

石材として使用されたかながわ産の岩石を紹介する展示の導入との位置づけで（図１参照）、「２」では先史時代（箱根畑宿産黒曜石製の石器）・中世（箱根山周辺産安山岩製の五輪塔）・近世（江戸城石垣用の石材切り出しの様子を描いた屏風）・近代（真鶴半島産「新小松石」の横浜船渠二号ドック石材）と民俗（丹沢山地鐘ヶ嶽周辺産の「七沢石（ならさわいし）」製の道祖神）の各時代・分野から人と石との関わりを象徴的に示す資料を展示した。続く、石にまつわる技術とその担い手となった人々に注目した「３」（図２参照）、神奈川県域産石材の他地域での流通と他地域産石材の県域での流通というふたつの側面から、石の流通をめぐる各時代の様相を見た「４」、生活の中の身近な石製品と石に対する信仰のありようを紹介し、庶民生活と石との深い関わり合いを示した「５」の後半３章が展示の核を構成している。「３」「４」「５」の各章は時代・分野で区分するのではなく、あえてそれらを横断するテーマ設定とし、石に関わる人々の活動の通時代的な展開を示そうと企図した。異なる時代・分野の 323 件、点数では 1,000 点におよぶ資料を、岩石学・考古学・歴史学・民俗学を専門とする学芸員による時代と分野を横断した多角的な視点で捉えて、石にまつわる多種多様な資料を紹介した展示であった。

展示のきっかけとなった「白丁場石」について、やや立ち入って紹介すると、この石材が歴博建物である旧横浜正金銀行本店と日本銀行本店本館（1896 年竣工、重要文化財）の外壁等に使用されていることは知られていたが、本展の準備段階に旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮、1909 年竣工、国宝）中庭の外壁でも使用されていたことが、宮内庁宮内公文書館所蔵資料と現地での確認調査により判明し、展示で関係資料を紹介することができた。

図１　「石展１」第１章展示風景

図２　「石展１」第３章展示風景

ただし、白丁場石は建築の外装材として単独で使用されることは稀で、多くの場合は花崗岩と併用されていた。その理由を丹治は、①安山岩系（岩石名はデイサイト）でありながら花崗岩と併用して違和感のない白色の石材であったことと、②花崗岩と比して加工コストが低廉であったことに求めることができると指摘した。このうち①については、前述した山下の「白丁場石」初見時のコメントがヒントになっており、歴史学者（丹治）と岩石学者（山下）の出会いと連携（コラボレーション）が新たな知見を生み出した実例と捉えることができるのである。博物館展示において新資料や新知見を提示することは、展示に深みを与える重要な要素であるし、近代の石材産業史や建築史研究の成果のひとつとしても挙げられよう。

岩石・石材という大型ではあるものの、比較的地味な資料で構成された展示であったが、来館者は1万人を超え、特別展図録も完売し、これまでの博物館展示でそれほど類例が多くはない自然系と歴史系の学芸員による共同企画は、内容的にも数字的にも一定の成功を収めることができたと考えている。しかしながら、展示ストーリーの構築や個々の資料の解説などで、自然系と歴史系の融合が十分果たせなかった点や、「白丁場石」のように一定の実態解明を進めたものの継続して検討していくべき課題を残したことも確かであった。

2 「石展2」の展示内容

次に、「石展2」であるが、この展示は共同研究着手時点から予定していたものではなく、「石展1」を歴博と地球博との共催展示として開催するという方向性が固まった後に、もともと地学系のテーマで開催する予定であった2016（平成28）年度の企画展枠で地球博版「石展」をやりたいという、地球博からのリクエストにより実現したものであった。地球博では、通常各年度に特別展と企画展を1回ずつ開催しており、企画展は予算も含めて特別展よりもやや小規模な展示という位置づけとなる。歴博は、「石展1」終了後に空調設備等の改修工事のため、2016年5月末から約2年間の休館に入ることとなり、資料や事務室の移転作業で展示準備に十分な時間を費やすことが難しい状況であったが、山下と新たにメンバーに加わった田口（「石展1」でも調査と普及事業の一部には関わっていたが）を中心に、「石展1」の課題を克服し、地球博視点で再構成した「石展」を成功させるべく共同研究を継続することとなった。

それでは、「石展2」の内容について、表1も参照し「石展1」との比較を交えつつ確認していきたい。「石展2」は「かながわの石材」「石を加工する道具」「石材と関わりのある人々」「箱根ジオパーク」の4章構成であった。岩石や五輪塔、石工の道具など、「石展1」とできる限り同一の資料を用いつつ、その資料を自然科学の視点で展示ストーリーに落とし込むことを基本方針に展示を構成した。

「1」は展示面積の3分の2程度を占めるメインパートで、県内各地で産出する32種類の石材を取り上げ、産出する地層や現地で採集した岩石、石材を採掘した丁場（跡）の写真や石材としての特徴、当該石材を使用した製品等を石材ごとにまとめて展示した（図3参照）。このような展示手法を採用したのは、山下の主張によるものであったが、これにより岩石と石材、石製品が同じ展示ケース内に並ぶこととなり、展示構成の中で自然

図3 「石展2」 第1章展示風景

図4 「石展2」展示解説の様子

系の資料と歴史系の資料の融合が進み、自然系の資料を独立した章で扱い（図1参照）、融合が不十分なものにとどまったという「石展1」の課題をクリアすることができたのである。なお、「石展1」と「石展2」を比較して、「石展2」では展示構成におけるコラボが深まったとの指摘は、関連行事として開催したシンポジウム「『石展』からみえてきたもの：人文系および自然系博物館の共催展示を読み解く」（2017年2月18日開催）でパネラーを務めていただいた佐々木健策氏（小田原市観光課）からもいただいたところである。また、「石展1」と同一の資料を用いることを基本方針としつつ、「石展1」では取り上げることができなかった地域の零細な石材にも注目しており、例えば地球博からほど近い箱根町湯本で採掘され、福住旅館（1877・78年竣工、重要文化財）にも使用されている「湯本石」について、新たに採集した岩石標本と切り出しに関する古文書を展示できたことなどは、その事例として挙げることができよう。

以下、「2」では丹沢山地の厚木市七沢（ななさわ）周辺で採掘され、江戸時代中期以降石仏や庶民の生活道具として使用された凝灰岩「七沢石」を加工するための道具類、「3」では「1」「2」で紹介した県内産石材と関わりを持った人々を取り上げ、最後の「4」では、地球博が拠点施設となっている「箱根ジオパーク」の石材関連のジオサイトを解説するコーナーを設けた。解説パネル等を含めて297点の資料で構成された展示は、地域密着型の零細規模の石材にも目を向け、前述したように歴博と地球博の学芸員によるコラボレーションの深化を達成することができ、地球博の企画展の平均を上回る来館者数を記録したことなどから（図4参照）、総じて満足のいく結果であったと評価することができよう。

まとめにかえて

以上、歴博と地球博という兄弟館に所属する専門分野の異なる学芸員による2回の共催展示の概要をみてきた。展示内容全般にわたる詳細な検証は果たすことができなかったが、このコラボの取り組みを小括し、今後の可能性を展望することで簡単なまとめとしたい。

このコラボが一定の成功を収めることができた最大の要因は、「石」というテーマ設定にあったのではないかと考えている。「石」は、採掘される地域の地質構造を規定要因として成り立つ究極の地域密着型素材であり、地域の自然的条件と歴史的事象を研究対象とする歴博と地球博の学芸員の共同研究に最適の素材だったということである。展示という明確なゴールが設定され、しかも2回の展示を担当することができたこともコラボの深化にとって重要な要素であっただろう。また、「石展1」「石展2」には考古学・中世史・近現代史・民俗学・岩石学・古生物学を専門とする学芸員が集結したわけだが、各学問領域において研究の細分化が進展しつつある中で、異なる学問領域の研究者と共同研究の機会を持てたことは、資料に対するさまざまな研究アプローチと手法があることを実感できる非常に刺激的で、また楽しい体験でもあった。

そのような取り組みを細々とでも継続すべく、2017（平成29）年度には「石展1」「石展2」に続く歴博と地球博学芸員によるコラボとして、歴博主催の連続講座「歴史系博物館×自然系博物館」を開催した。石展メンバーの一部（考古学・近現代史・岩石学・古生物学）に、歴博の現代史（＋歴史地理学）・彫刻史・絵画史と地球博の画像解析学・植物学・哺乳類学の学芸員が加わり、歴博と地球博の学芸員が共通のテーマや資料についてそれぞれの専門分野の視点で語る中から、専門分野の枠を超えたコラボの可能性を探ろうとしたもので、参加メンバーはそれぞれに刺激を受けている様子であった。今後もお互いを刺激し合える兄弟館の関係を維持していきたいと考えている。

参考文献

丹治雄一・山下浩之・千葉毅・鳥居和郎・新井裕美編著『石展―かながわの歴史を彩った石の文化―』（神奈川県立歴史博物館特別展図録、神奈川県立歴史博物館、2016年2月、pp.1～112）

山下浩之・笠間友博「神奈川県湯河原町に産する通称“白丁場石”の岩石学的特徴」（『神奈川県立博物館研究報告―自然科学―』第44号、2015年3月、pp.1～10）

丹治雄一「神奈川県立歴史博物館『石展』開催報告」（『建築史学』第67号、2016年10月、pp.242～244）

丹治雄一「近代洋風建築に使用された石材『白丁場石』の歴史」（『遺跡学研究』第13号、2016年11月、pp.106～112）

田口公則・山下浩之「神奈川のおもな石材産地と石造物」（「石展2」配布フリーレット、2016年12月、pp.1～4）